青

香衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
青

【Ｎコード】
Ｎ２９０７Ｅ

【作者名】
香衣

【あらすじ】
ある少女の葛藤を書いた小説です。

1

鮮やかな青色が広がり、早朝から真夏の強い日差しを受け一層白く輝く雲たちが、右から左へとゆっくりと空を泳いでいる。その雲を追いこすように、一台の自転車が坂道を下ってゆく。色素の薄い髪をなびかせ、颯爽と翔けるように自転車を走らせる少女の姿は、すれ違う人々を魅了していた。

丘の上には所狭しに住宅が立ち並び、アパートの二階のベランダで忙しそうに洗濯物を干している主婦や、ネクタイを調えながら慌しく走るサラリーマンなど、到るところでごく日常生活を送る人々の姿が見られる。その住宅街を抜け、大通りを挟んだその向こうに、少女が通う県内有数の進学高校がある。

大通りの信号機が点滅を始め、それに焦ることなく自転車にブレーキをかける少女。キッキっと音を立て車輪の回転が止まると、少女はふわりとその細く長い身を地に着けた。少女を筆頭に、続々と同じ制服に身を包んだ青少年達が交差点で足を止める。

「あれ？唯！」

自転車を支えながらも凛と立ち居っている少女に声をかける、同じ制服を身に纏った一人の少女。唯と呼ばれた少女は、自転車を支えながら、色素の薄い髪からシャンプーの香りをふわりと漂わせ、首だけで振り向き、笑顔で「おはよう」と声を返した。

「自転車だなんて、めずらしいわね。朝から自転車に乗ると汗かかない？」

「今日は、ちょっと寝坊しちゃったの。」

「夏休みボケ？」

唯とは対象的に、可愛らしく無邪気な笑顔の少女は、加奈と言った。

加奈はクルクルの髪に空気をいっぱい含ませ、走ってきたわけでもないのに、血色が良く、白い肌にはその頬と、ぽってりとした唇の薄らピンクがよく映える。まさに春をイメージさせるような少女だ。
「唯でも寝坊するの？」
「あはは。」
唯と加奈は幼馴染である。８年前に母が再婚し、引っ越すまでは、忙しい母の代わりに加奈の母親が唯の面倒までみてくれていた。幼少時代の５年間をともに過ごしてきた加奈は、唯にとって、姉妹どうぜんだった。
ポッポと信号機から鳩の鳴き声のような音が聞こえ、唯は友人に少し困ったように笑顔を向けると「急ぐから」と再び自転車に跨った。
（昨日は寝るのが少し遅かったからね。）
心の中で、追及されることを考えると加奈に言えなかった返答をしながら、唯は先を急いだ。

学校に着くなり、唯は職員室へと向かった。
鞄から皺だらけになったＡ５サイズの紙を大切そうに取り出すと、「失礼します」と一礼し、担任の教師の姿を探す。
いい大人の教師ですら、その大半が唯に視線を奪われ手が止まる。
その容姿がいかなものか、周りの様子から口に出さなくてもそれだ

けでわかるが、唯はその容姿以上に、目に見えない人を惹きつけてしまうものを持っているようだった。
職員室にお目当ての教師の姿は無く、唯はくしゃくしゃの紙を伸ばし、そっと担任の机の上に置くと「失礼しました」と再び一礼し、職員室を後にした。

廊下の窓から向かいの校舎の３階、一番左に唯の教室が見える。声こそ聞こえてこないが、楽しそうなクラスメイトの姿を見つめる唯。
「如月唯さん！」
職員室を出て３ｍも廊下を歩かないうちに、唯は呼び止められた。あまり身だしなみを気にしていないのか、寝癖のついた髪に、黒渕で分厚いレンズの眼鏡をかけた３０歳前後の小太りの男性が駆け寄ってくる。Ｔシャツにはｆｒｅｓｈと書かれているが、その風貌にその言葉はあまりにも不釣合いである。
「如月さん、担任の高木先生に何か用だったのかい？」
「いえ、特に。」
「良かったら、私から伝えておこうか？」
不衛生そうなその教師が詰め寄る、唯は男の様に怯む事なく淡々と言葉を返していた。
この男、唯のクラスの副担任・佐々木隆である。見かけに寄らず熱血で、妻帯者だが、担任である高木陽子と美女と野獣コンビなどと生徒たちから囃されている。
（この人、悪意はないのだけれど、ちょっと困るなぁ。）
「佐々木先生、大丈夫ですから。別に急ぎというわけでもありませんし。」
そう言うと、なんとかその場を笑顔で誤魔化し、高木先生に軽くお辞儀をすると、唯は教室へと急いだ。

長い夏休みの全校登校日。体が怠け、ダルそうにしながらも久しぶりの再会を廊下で喜び合う生徒達。数人で輪になり、夏休み前半の出来事を面白おかしく話している様を、唯は横目に通りすぎてゆく。唯はある理由により、必要以上に人付き合いをしないので、お世辞にも友人が多いとは言えない。そのせいで、「お高くとまっている」と影で言われることもあった。

「いた、いたぁ！唯！」

声の方を向くと、先ほどの交差点の少女が教室から顔を出し、こちらに向かって大きく手を振っていた。唯は口元を緩ませながら、早足で加奈の元へ向かった。

「もうどこに行っていたの？もう予鈴が鳴るよ。」

「ごめん。ちょっと職員室に用事があって。」

「ふ～ん。」

二人のたわいのない会話は、予鈴とともに担任が教室に入ってくるまで続いた。

2

「くぅ〜。」

放課後の中庭の駐輪場で一人。辺りを見まわす限り誰もいない事をよしとし、思いっきり気伸びをする唯。久しぶりの学校でかなり気を遣い、だいぶ疲れた様子で、軽く肩を叩くしぐさをしてみせる。唯の家は丘の上にある為、行きは下りばかりで楽なのだが、帰りはひたすら自転車を押しながら登り続けなければならない。

放課後といっても、夏休みの登校日は半日もなく、まだ昼前で、陽が頭の上でギラギラとしている。部活でも入っていれば、ちょうど日が沈む頃に帰宅となるのだろうが、あいにく部活には入っていない。

唯は晴天白日な空を見上げ、肌にじりじりと突き刺さるような太陽光を浴びながら、これからの帰路を考えると、顔をしかめながら「ふぁ〜ぁ〜っ」と大きいため息をついた。

「如月さん？」

誰もいないと完全に油断していた唯は、後方より聞こえた自分を呼ぶ声に驚いた。それと同時に、「ふぁい」となんとも間抜けな返事をし、反射的に声のするほうを向いた。

振り向くと、自転車2，3台離れたところに、この季節に似合わない白い肌で、犬のような目をした優男の青年が立っていた。

声の主は、唯が振り向いた事に一瞬戸惑った様子を見せたが、その表情はすぐに冷静なものへとなった。

「お嬢様がいま、音を立てて崩れてったかも。」

必要以上の会話を避けている唯は、気づけば周りから口数の少ない理想のお嬢様像を作り上げられていた。勝手に自分の人間性を決め付けられる事にいい気はしないが、おかげで周りは唯と距離を置いてくれるようになったので、別にそれを否定するも肯定するもせずにいた。

（勝手にお嬢様って思っているだけだって。）
心とは裏腹に、唯は少年に対し笑顔を向けた。笑顔と言っても、唯にとっては口角を上げ、首をかしげているという動作をするだけで、営業用のスマイルのような感覚である。このような事は今までにも何度かあったが、「じつはみんなが言うようなお嬢様ではありません」などとメンドクサイことはなるべく避けたいので、唯は、たいていはこのスマイルで誤魔化してきた。
だが、この少年は、一筋縄ではいかないようである。
「気づいてはいたんだけどね、でも、それを目の当たりにしてしまうとショックだよな。」
骨格の良い少年は、唯のスマイルなどまったく無視し、不敵な笑みで顎を上げてその長身からさらに高く、まるで挑発しているかのように、唯を見下ろしていた。
すべてを見透かしているような少年の態度に、唯は一瞬戸惑いを覚えた。
だが、少年の態度を見ているうちに、夏の日差しに当てられたのかだんだんと自分の顔が熱くなってゆくのを感じた。
「なにが言いたいの？」
唯は早なりの心臓を落ち着かせようと胸に手を当て、静かに青年に答えた。他人にはあまり関心をもたない唯が、この少年に嫌気を覚えていた。
少年は唯の問いに答えることはなく、二人の間に沈黙が流れる。
駐輪場には、ただ、セミの鳴き声だけが響いていた。
数分間沈黙の後、唯の眉がピクリと動き、今にも何か言い出しそうであった。が、以外にも先に少年が口を開くと、なぜか自己紹介が始まった。
「僕はB組の鴉ケ岡響介。覚えておいてね、如月唯さん。」
語尾をおちょくるような言い回しで自己紹介を終えると、響介は細く微笑み、駐輪場を後にした。唯はその背中が消えるまで、不機嫌な顔を続けた。

「何なの？」
はき捨てるように呟き、ふと、唯は自分が酷くいらついている事に違和感を覚えた。挑発的な態度をとられたくらいで、冷静さが欠けてしまうような性格ではない事は、自分でもよく分かっている。物心ついたころには、自分の感情を押し殺し、何もなかったことにする術を身につけていた。だが、鴉ヶ岡響介と名乗る青年に対し、なぜ、こんなにイラついてしまったのだろうか。
（何だろう、なんだか胸騒ぎがする。）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2907e/

青

2011年1月27日14時51分発行